

提

言



『家の光』にみる JA女性組織の歩み ～今後の組織活性化に向けて～



増田祥世

酪農学園大学 准教授

ますだ・さちよ／1979年東京都生まれ。北海道大学大学院農学院博士課程修了。農業従事などを経て2023年度より現職。専門は農協論、地域農業論。主な研究内容は農協女性部の組織活動や女性農業者の地域農業への参画など。自身も北海道JAながぬま女性部に所属し、食育活動などに取り組んでいる。

現在、多くのJA女性組織では、部員の減少・高齢化など組織の存続にかかわる課題に直面している。筆者は「JA女性組織は農協にとって重要な組織である」という立場から女性組織の研究に取り組む一方、組織の一員として活動に参加している者でもある。本稿では、雑誌『家の光』と筆者自身の活動経験をもとに、JA女性組織活動の本質について改めて考えるとともに、これからの女性組織にとって必要と思われる3つの視点を提言したい。

■ 1. 『家の光』にみるJA女性組織活動の本質

(1) 『家の光』とJA女性組織

雑誌『家の光』は、1925年に産業組合によって協同の精神を家庭で養うことを目的に刊行され、2025年に創刊100周年を迎えた。創刊当時、『家の光』は農家女性が家庭で手に出来るほぼ唯一の情報媒体であった。情報の少なかった当

時の女性にとって、『家の光』は最新の農業技術や社会情勢を学べる教科書のような役割も果たし、農協婦人部・女性部活動でも『家の光』の記事が活用された。女性組織を対象とする教育文化活動、各種研修とも連動していることが多く、100年という長きにわたり、『家の光』が農家女性の学習や女性組織の活動を支え、助けてきたことは間違いない。

（２）ＪＡ女性組織活動の普遍的価値

『家の光』においては1960年頃から婦人部に関する記事が不定期に掲載されるようになり、80年代以降は定期連載として全国の婦人部活動が紹介されている。下段の表は各年代の婦人部・女性部の記事の主なタイトルであるが、これをみると婦人部・女性部に関する記事には、「自給」「農産加工」「学校給食」「健康」「環境」といったキーワードが繰り返し登場し、90年代以降はここに「消費者との交流」や「地域とのつながり」「食育」といったキーワードが追加されていく。記事の詳細は割愛するが、タイトルをみるだけでも、1940年代に農協婦人部が誕生してから今日に至るまで、これらの「暮らしを守る活動」が一貫してＪＡ女性組織の重要なテーマであることがわかる。この表をみると女性組織が取り組んできた活動は、時代の変化の影響は受けつつも、80年近い歴史の中で大きく変化はしていない。それを「活動のマンネリ化」と評する人もいるかもしれないが、筆者は、これらの活動が時代を超えて私たち人間の暮らしに本質的に必要な活動であるからこそ、変わらずに続いてきたのだと考え



『家の光』創刊号(1925年5月号)の表紙。
家庭から協同の心を育むことを目的にした
家庭雑誌

表 『家の光』における女性組織に関する記事タイトルの一例

年代	タイトル
1970	農協婦人部の活動記録入選作 婦人の健康管理活動に取り組んで
1980	農協婦人部交流 健康を守る自給作戦 農協婦人部交流 暮らしを守る農産加工 農協婦人部交流 若妻の力で米飯給食
1990	アクティブ婦人ゼミナール 物から心へ深めたい消費者との交流
2000	ＪＡ女性組織輝く21世紀スタイル 野菜市の運営は消費者とともに ＪＡ女性組織輝く21世紀スタイル どうやってますか？「地産地消」
2010	みんなでできた！女性組織 加工品作りを引き継いで地域の食文化を守ろうの巻 みんなでできた！女性組織 人と地域をつなげるカフェで活躍の巻

る。ＪＡ女性組織活動の本質は「暮らしを守ること」であり、その活動は時代を超えた普遍的な価値を持っているのである。

■ ２．ＪＡ女性組織のこれからを考える３つの視点

このようなＪＡ女性組織の本質を改めて認識したうえで、これからの女性組織のあり方について筆者は以下の３つの視点を提言したい。それは、（１）量的拡大から質的深化へ、（２）農協事業と結びついた展開、（３）性別を超えた連携、の３つである。

（１）量的拡大から質的深化へ

現在のＪＡ女性組織において部員数の減少は大きな課題であるが、これからの女性組織を考えるうえでは、部員数という量的な指標だけでなく、活動の質を高める質的深化が重要だ。筆者自身の例で恐縮だが、筆者が所属するＪＡながぬま女性部の料理部会では、高齢化などを理由に一時部員数が大きく減少した。しかし、数年前から始めた食育活動（「なないろ食堂」）が部員たちのやる気を高め、活動回数は増加している。なないろ食堂では農協職員に対する食育を目的として、部員たちの生産する農産物を使ったランチバイキングを提供している。回を重ねる毎に来場者が増え、部員たちの提供メニューに関する話し合いも活発に行われている。以前は、部会で習った新しい調理技術やメニューは、基本的には家族などの個人的な範囲に提供されていたが、食育活動に取り組むことによって、その



女性部員が運営する「なないろ食堂」は、農協職員への食育活動となっている

活動が公益性を持つようになり、部員たちのやりがいにつながっている。この事例などは、部員数は減少したものの、活動の質が高まった事例と言えるのではないだろうか。

(2) 農協事業と結びついた展開

J A 女性組織は、元来、女性たちの親睦組織というイメージが強い。その機能ももちろん大切であるが、女性組織の評価をそれだけに留めるのは一面的である。女性組織の農協での位置づけを明確にし、農協事業と結びつけて展開することで、女性組織はさらに大きな力を発揮する可能性を持っている。以前筆者が調査した九州の農協では、女性組織の中にたくさんの目的別組織が作られ、それらのグループが作った加工品が、農協が運営する直売所の売上第1位を誇っていた。冠婚葬祭事業にも女性たちの加工品が採用されるなど、女性組織の活動が農協の事業と結びつき、売上だけでなく、農協のファンづくりや准組合員の獲得に貢献していた。この農協では女性組織の重要性が十分に認識され、女性の農協参画も進んでいる。農協における女性組織の位置づけの明確さや価値観が、組織体制にも事業にも反映されているのである。

(3) 性別を超えた連携

近年、加入者の多くが男性である J A 青年組織などでも、農産加工や食育活動が盛んに行われ、女性組織の活動と共通性を持つようになっている。本来、くらしを守ることは、人々の共通の願いであり、こうした取り組みに高い関心を持つ地域住民も多い。今後は、活動や目的を軸として、性別や属性を超えた連携や組織づくりを検討することも必要であろう。

■ 3. 地域のくらしを守る J A 女性組織の価値

J A 女性組織の活動は、経済的なものさしで測ることが難しいことなどから、農協においてこれまで過小評価をされる傾向にあったように思う。しかし、農協は組合員の生活と営農を守る協同組合であり、女性組織の活動は農協運動の根幹に関わる性質を持つ。最近では地域のくらしを守ることが農協に期待されているが、J A 女性組織は地域や年代を網羅しながら、農や食を軸に人々のくらしを守る活動をこれまでもずっと続けてきた。こうした強みを持つ組織は、女性たちだけでなく農協にとっても大切なものであり、その価値を農協全体で認識し、守っていく必要がある。さまざまな生活不安が強まる昨今、女性組織がこれまで取り組んできたような活動の意義は非常に大きく、農協全体でその重要性を正しく認識し、評価することが求められているのである。